

## 第54回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

後悔から学んだ大切な事。

長野県 小諸市立芦原中学校 二学年

高地 もも

私の家族にとって六月は特別な月だ。母いわく「家族にとっての一大イベント」との事だが、わかりやすくいえば母の誕生日があるからだ。毎年私と祖母が中心となり、母の誕生日会を企画して、皆でお祝いをし、母は祖母に生んでくれた事への感謝を伝える。特別な一日であり、これからも変わらず続いていくイベントなのだと思う。

平成二十八年六月。私の大好きな祖母が闘病の末、亡くなった。毎年続いていた母の誕生日会は祖母が亡くなって全く違う形になってしまった。誕生日当日、母が泣きながら祖母の写真に語りかける姿を私は忘れる事ができないと思う。祖母が亡くなって二カ月が過ぎたが、母は今でも祖母を失った喪失感と後悔から自分を守るかのように毎日忙しい自分を更に追い込み、くたくたになるまで昼夜問わず働き、家事との両立をこなしている。このままでは母が倒れてしまうのではないかと日々心配して声をかける私に、「大丈夫だよ。」と力なく笑う。母にとって祖母がどれ程大切な存在だったのかを、こんな形で知りたくはなかった。

祖母の病気が発覚した時、母は『絶対に治してみせる。』という強い信念のもとに、多くの情報を全て調べあげ、祖母にとって最も有効な治療の計画を担当医師と共に立てていた。しかし、いざ治療を始めようとした時に祖母が保険に加入していない事が発覚した。保険に加入していると思っていた母は、それによりもたらされる安心感で行動していたのだ。病気の治療はお金がかかる。安心を失くしても信念を曲げる事なく母は祖母に治療を受けるよう頼んだ。その熱意に祖母も治療を了承してくれた。

祖母の病気により私達家族の生活も大きく変化していったが、家族一丸となり祖母の病気に立ち向かおうとしていた矢先、祖母が治療を拒否するようになった。理由を聞く母に、祖母は保険に加入していなかった事への謝罪と高額になるであろう治療費の負担を負わせたくないからと答えた。祖母には何も心配する事なく治療に専念してもらい、早く元気になってもらいたい。私達家族は皆そう思っていた。もしも保険に加入していたら、少なくともこんな辛いやり取りはおこらなかった。一番辛い思いをしている祖母に精神的に大きな不安を与える事も母が後悔し続ける事もなかったと思う。

今回私は祖母の死という辛い経験を通して、もしもの時への備え＝予防が

## 第54回中学生作文コンクール

本当に大切な事だと感じた。保険に加入していなかったという事で祖母も含め私達家族はたくさんさんの不安や心配や限界を感じ、一番大切な祖母の看病に百パーセント集中する事ができなかった。人の命に関わる事に、もしもの備えをする事を心良く思わない傾向がある事は理解してはいるが、命はたった一つしかないのだ。たった一つしかない大切な命に対し何も備えておかない事に私はむしろ怖さを感じた。

日本の社会保障制度は充実していて、もしもの時には一定の保障は受けられる。だが充分ではない。その時に役立つのが生命保険なのではないだろうか。生命保険はたった一つの命に自ら備える事ができる“予防”なのではないかと思う。自分の命に真剣に向き合い予防する事で自分自身の大切な人を守る事ができる生命保険は“愛情の証”ともいえる気がした。

私はこの辛い経験から多くの後悔と向き合い学んだ。後悔から学ぶ事は、二度と同じ後悔をしない事だと思う。私は祖母を決して忘れる事なく一生懸命生きていこうと思う。そして、自分と自分の大切な人達を守れる人になるんだと心に決めた。